
桜

秋茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜

【Nコード】

N6345V

【作者名】

秋茜

【あらすじ】

この小説は、他サイトから転載しています。

『あの日は桜が舞っていた。…私は、あの頃に戻りたいのかもしれない。』

プロローグ

あなたと出会ったとき、
私は心を手に入れた。

あなたと出会ってから、
私は笑顔を手に入れた。

あなたは私に
安らぎを与えた。
優しさを教えた。

私はあなたに、何ができた？何を返せた？

どうすればあなたは、あの時行かないでいてくれたのだろ
う？

ねえ、君は今どこにいるの

拒絶されてもいい。
会いたいんだ。

待つてて。僕は、君を探しに行くから。

もういちど会えるまで、僕は諦めないから。

あれからずいぶんたった。

私は、まだあなたに会えないでいる。

私は、どうすればあなたに会えるんだろう。

どうしてあなたは、私に会おうとしてくれないんだろう。

あなたは、私を忘れてしまったのだろうか

プロローグ（後書き）

始めましての方は始めまして。秋茜と申します。

まず始めに、ご覧ありがとうございます。どうか見守ってやってください……。

第一章・「桜の花」

『誰か、呼んだ？』

ふと後ろを振り返ったが人はいない。

（幻聴：？）

耳に水でも入ったかな、とんとんと耳の後ろを叩く。

朝起きてから今まで、プールに入ったわけでもないし、顔を洗うのに失敗したわけでもない。今は、春だ。

「…まあいつか。」

黒いＴシャツにジーパンという、きわめてラフな格好の少女は呟いた。

手に持った黒のリュックサックに手を入れ、ごそごそと取り出したのはビニールシート。さらにそれを今いる木陰に広げ、座り込む。靴を脱いで足を伸ばし、木に背中を預けた。

ここは奈良公園。日本に住む人間なら、存在ぐらいはたいていの人
が知っている。

さきほども書いたが今は春。彼女はお花見に来ていた。ここは地元
の人間でなければあまり分らない特等席だ。そのせいだろう、彼
女の周りには人通りが無い。

しかし、これは奈良公園の名物というか定番というか。

人間のかわりに、野生の鹿達が彼女の傍にいた。鹿せんべいが目当
てらしく、近づいてもきている。

だがあいにく、彼女は食料は持って来ていない。

「ごめんだけどキミらのご飯は無いよ、川のほうへ行って。」

食パンでも持ってきておけばよかった。だが今から家に帰るつもりも無い。今度にしておこう。

(…本でも読もうか。)

お花見に来ておいて読書とはどうかと思われる方がいるかもしれないが、ここに来るのは今年に入ってからでももう三度目なのだ。

もう一度リュックをごそごそやると、それに勘違いしたらしくシカ達が増進するように頭を擦り付けてきた。慌ててリュックのチャックを閉める。鹿がリュックの中をのぞき込もうとしたからだ。

おかげで奥のほうに入っていた文庫本は取り出せず、ごついスケッチブックしか手元には無い。

(…絵を描くか。)

彼女はポッケに入れておいた鉛筆を取り出し、周りに咲く桜の花木を描き出した。

「あーでもホントいい天気だねー…」

お花見日和。ぽかぽかで、明るい。ほのぼのとしながら手を進める。うん、いいかんじ…

すらすらと描き上げていくのは風景画。気分も調子もよく、そろそろ鹿も描こうか・・・と思ったときだ。

「うつわあ…すごい角…」

目の前に、立派な雄鹿がいた。

まずその立派過ぎる二本の角に目が持つていかれる。すらっとした首、たくましい足腰の筋肉がこの距離でもうかがえた。毛並みには、触りたくなるようなツヤと光沢があった。

…ここのシカ達の王様？そんなメルヘンもいいとこな台詞が浮かんだ。

しかしそのぐらい格好いいのだ。目がキラキラとコガネムシのように輝いてる。その黒い瞳にはこのあたりの鹿達とはなんとなく違う落ち着きがあり、ひたとこつちをまつすぐ見つめていた。

ああカメラを持ってこればよかった。

そのとき自分がスケッチブックを膝に乗せていることを思い出し、大急ぎでページをめくって鉛筆を走らせた。

書き留めないと、描き留めないと。あとから思えばおかしな考えに疑問を抱きながら手を動かした。

こんなすごい雄鹿を見れたことだけでもものすごい幸運だ、宝くじで三億当たるぞ、なんて言われても信じてしまいそうだ。

カリカリカリ……

シャカシャカシャカ……

ふと顔を上げると、いつの間にかその鹿は消えていた。

…音が1つも聞こえなかったぞ？首を傾げたが、いそいでスケッチブックを置き、靴を履いて立ち上がり、鹿を探し始めた。もうほんの少しでも、あの姿を目に焼き付けておきたい。

大量の落ち葉のじゅうたんが広がる木々の間を抜け、急ぎながらも音を立てて脅かさないように気をつけて走った先には、行き止まりの標識が立っていた。

（…若草山への進行を妨げるフェンスか。）

ちなみに若草山というのは奈良に聳える小さな山である。子供のお小遣いにもならない程度の入場料を払えば大抵10分もしないうちに頂上へたどり着く。ついでに毎年山焼きという行事があり、たくさんの花火が上げられかなり綺麗だ。一度見物をして欲しい。

その山焼きのために桜咲く季節に入場が規制されているのはよく分かっているが、これ以上に無いってぐらいにがっかりし、そして若草山へ入るのにお金がいることを怨んだ。

…帰って記憶の中で描こう、なるべく忘れないうちに戻ろう。と、広葉樹林の林を抜けようと来た道を戻り始める。

よく考えると、このあたりは来た事が無い。そう思いながらも、彼女は歩を進めた。

第一章・「桜の花」(後書き)

前置き長い…

第一章・2

『…見つけた』

「え？」

まただ、と振り返るとした首が、動かなかった。いや、動かせなかった。

ぞくり。

春真つ盛りで、あたたかくて明るかったはずが今は違った。寒いからでもあり、精神的なものでもある冷たい汗がつつと額から流れ落ちる。何かがおかしい。なんだ？この寒気は。

「ッ、」

なんかやばい。

本能的に逃げることを体に命令が下る。しかし体のどれもがそれに従わない。

『…見つけた』

声が、はつきり聞こえた。

知らない言語だった。

しかし彼女の脳には、“理解できる言葉”として流れ込んだ。英語の成績がどのというより、頭の中に直接響く感覚がする。

カチンと凍ったように動けず、頭が回らないが本能的な恐怖を感じ取り、喉すら振るわせられない状態で叫んだ。

「誰！？」

桜の薄ピンク色が消え、辺りは黒と身をつく寒さがあるのみだと少女は思う。

指先が冷えてくるのを感じながら後ろに居るのであるう何者かを見ようとする。

もしかしたら人でもない、この世のものですらない気がする。

恐怖の渦が頭の中を回るが、瞼1つ動かせなかったが、しかし振り返ろうと思わずにはいられなかった。

「…誰」

おかしな力と、震えが邪魔をしていたくちびるがやっと動かせた。もてるだけの力で叫んだつもりだが人が居ないここでは助けは期待ができない。どっちにしろそこまで大きい声ではなかった。

バツ、と写真のフラッシュのような、突然の光が目の前を埋め尽くす。緑色の光だった。

まぶしさに目をギュッと瞑り、身を硬くし、頭の中で叫んだ。

（タスケテ！！）

ふっと、体が軽くなり、手足が自由に動くことを少女は理解した。

寒い日に暑い湯船に浸かったときにじーんとするような感覚がした。例えようの無い安心感のようなものが胸を満たし、そろっと目を開いた。

（ ア、 ）

白い、優しい光が、あった。さっき見た、あの雄鹿だった。

あつという間も無かった。

目の前の雄鹿が白い光に包まれているのか、それとも白い光を発しているのか認識する前に、その鹿はぱつと地面をけって脇を通り過ぎていった。

「…？」

もう、さっきの悪寒も恐怖も無かった。

あるのは取り残されたような表情と桜吹雪。風が出てきたのだ。とにかく戻ろうとふらふらしながら歩き始めた。

驚きと恐怖がカーテンのように記憶を隠し、思い出させようとしな
い。しまいにはなぜここに来たかすら思い出せないでいた。

それでもどうにか映像がまイメージとまるが、そうでないところでもう1つの事件が起きた。

「うわー！！」

ぶつぶつ言いながらビニールシートの方角を見たら、可愛らしい雌鹿がリュックサックの中身を鼻の先でつついていた。
しかも、スケッチブックが破られている。

「わー！ ストップ！」

大急ぎで走り、見えたのはスケッチブックの無残な残骸。

…こいつ、紙食べたな！

知らない人もいるだろうけれど、鹿は紙を食べる。山羊のように。お手紙食べちゃうのは白ヤギさんと黒ヤギさんだけではない…口をむしゃむしゃさせているのがその証拠だ。

「鹿せんべ、買ってくつから紙なんか食べんなお腹壊すぞ待てー」

…ハプニングにより、このとき彼女は今まで考えていたことを忘れてしまった。

スケッチブックの、ちょうど描いたページは雌鹿の腹の中。

第一章・2（後書き）

ちなみに最後のは実話です。スケッチブックを5ページほどやられました。

第一章・3

キンコンカーンコン……
下校時刻を知らせるチャイムが鳴った。月曜日がやっと終わったところ、あまり嬉しくない。

「どしたん？ぼーっとして」

「あ、なんでもないです先生」

「そう？んならええわ、ちよつと来てくれる？」

声をかけられたときから感じてはいたが先生につられて来たのは図書室。

ああそついえば新しい本が入ったって図書週間に書いていたつけ。彼女、桜花電は図書委員会に所属している。放課後の手伝いをさせられることもしばしば。

まあ、一番に新冊を読めるというメリットがある。嫌いな仕事ではなかった。

「そっちのダンボールの中身を運んで欲しいのよ」

「はい」

中身は歴史小説ものの分厚い本が沢山だった。挿絵を見て電の胸が高鳴った。

「うわー…おもしろそー……」

「読むのは後にしといてね」

「わ、分かってますって」

一時キラキラと目を輝かせた電は慌てて本をダンボールから出す。

自分でも理解しているが電という子は一度本を手にとったら読み終わるまで話さなくなる本好きの典型的な女の子だったりする。そんな訳で先生とは長めの付き合いだから、ストップをかけてくれるのはありがたい。

「早く終わらせられたらここ使かっていいから」
「よっしゃすぐ終わらせよ」

お駄賃として、最終下校時刻までの読書タイムを約束させてくれるのはまた嬉しい。
部活をサボるのは気が引けるが今日はどうだっていいというのが本音であった。七面倒くさいミーティングで終わるはずだ。
もう春休みが近い。

「……って先生ついいきなり重たい箱持たせないでびっくりした」
「あ、そだ。春休みも一回来て欲しいのよ」
「え！？」

アバウトで自己中過ぎるだろうというツッコミが入るがニコニコは途絶えない。いや、相手にしていないのか。

「今月の27日ねー お茶とお菓子あげるから9時に来て頂戴ね」
「うわー悪い笑顔ー っていうか27！？その日誕生日なんですけど！？」
「え、そうやったん？でも来てもらわなきゃ困るんよ」
「はー…分かりましたよ。9時ですね」

桜花としてはこの先生は性格はともかくいい人だと思う。
とりあえず約束はやぶらないし嘘つかない。だがたまに溜め息が出る。

「にしても桜花も17か！彼氏いない歴17ねー」
「本の角で頭なぐりますよそれが人にモノ頼む態度ですか」
「あんた具体的なこというから現実的で怖いわ」

火傷をした。

久しぶりにお菓子でも作ろうとドーナツを揚げていたら中に空気が入っていたらしい。
膨張していきなり破けた。
熱い油が手や肩に掛かった。熱いというよりもびっくりした方が大きかった。急いで水で冷やしたがまだひりひりする。

7日前の話。

「あーまだ治りそうにも無いか」
「どしたん火傷？」
「あ、はい。揚げ物が爆発して」
「…どういうこと？」
「中に空気入ってたんです」
「そうか…。この前は気付かんかったけどな」

この前、というのは月曜日の事だ。火傷は7日前の日曜日にした。

「んーだんだん広がってきてるみたいでイヤですよー」
「そうなんか？」

現在、職員室。3月27日の朝9時。電は山済みの本を指差し、言
った。

「これを運ばいいんですよね」

「おおそうや頼んだでーウチもすぐ行くから…って忘れてた」

「はい？」

先生はコーヒーカップを置き、桜花に向き直った。にっと笑って「
誕生日おめでとうな」と言う。

「覚えてたんですか」

「ひどっ」

「いえありがとうございますでもそれなら仕事押付けてジュース買
いに行ったりしないでくださいよ」

「わかつとるって」

どうだか、と笑いながら職員室を出る。

…それにしても重い。

本を入れたダンボールに、学生カバンも持ってるのでバランスが取
りにくい。

カッソ、カッソ、廊下を渡り、階段を登りながら中身をチラッと見
る。

「新品の図鑑と詩集・・・あ これ、ウォーリアーズ？」

…ウォーリアーズならすでに全巻図書室にあつたはずだけど。わざ
わざ文庫版を取り寄せたのか。

図書室の本はほぼ読み終わってしまった電だ。

「あ、音楽の教科書みたいのまである…なんに使ったか」

たまに誰も読まないような本が隅っこに置かれているのは図書室の1つのナゾだ。逆にずっと帰ってこない人気の本もある。

電は独り言を続ける。春休みなのですれ違う先生もいない。

「文庫版がほかにもあるわー…人気のヤツばっか…ライトノベル多いなー…ん外国の作家のヤツも…」

よいしょ、と1階の階段を登りきり、次の2階の階段に向かう。チリン、とカバンのお守りに付いた鈴が鳴った。

「あ、ハリー・ポッターまで…うわ“死の秘宝”（最終巻）まであるじゃん」

ぎし、と階段がきしんだ。

ハリー・ポッターは世界各国でベストセラーになったと聞いた。自分も読んだし映画も見た。にしてもどうやって映画というのはあんな映像を作ってるんだ？と思うあたりそろそろ夢を失ってるのかなとも思うが白くて透けた守護霊のがとくに印象深かったのを覚えている。

ハリーの守護霊は牡鹿だったはずだ。…鹿？

（鹿といえば……）

そのとき、緑色の光を見た。

階段にライトなんかあるわけが無い。この階段には鏡もないし窓も

無い。唯一あるのは小さな天窓だが、曇りガラスで、第一閉まっている。

…ごちゃごちゃと考えている間に、緑色の光が一面に広がっていった。

この色をどこかで見たことがある。

そう電は思った。…そうだ思い出した。7日前のあの時だ。こんな風にいきなり緑色のはじけて…真っ暗だった。

思い出した瞬間、体中に恐怖が走った。どうしてこんなことを7日も忘れていたんだ？というぐらいには驚いていた。

「……！」

頭の中で真っ白な光がぱつと輝いた。…そうだあの大きなオスの鹿、で思い出しかけたのはあれだった。そこまで考えて、電は意識を手放した。

覚えているのは、恐怖を感じながらもきれいだと思った、緑色の光と……目の端に写った、薄ピンクの花びらだけだ。

第一章・3（後書き）

修正めんどーい。

行間

緑の光が闇と一緒に目の前を覆う。

何も見えないのがどうしようもなく怖かった。とにかく怖い。

助けて、と言おうとしたが唇も、喉も動かない。

なにかに引つ張られて尻餅をつき、同時にその何かが覆いかぶさってくるような感覚がした。

恐怖と悪寒が交じり合って、いやだ、というよりも先に感じたのはそれに対する拒否だった。

（来るな！！）

その瞬間、何か**が**びくつと震えた気がした。

それと同時に燃えるように真つ赤な光が瞬く。

目を開けてそれを確かめる前に力の限界を感じ、火の中にいるような錯覚と共にゆっくりと倒れこんだ。

人間は一定の量の恐怖を受けるとパニックを起こすか処理しきれずにそのものを放棄するという。電はその後者だったようだ。

（……誰？）

このまえの雄鹿か、それとも…

第二章・「翠と紅と白の光」

チャプン…。チャプン…。

舟を漕ぐように継続的な水の音に、電は意識を覚醒させた。

制服のまま、それも足を投げ出して地面で眠っていたかと思うと高校生女子としてどうかと思う。いや、それよりも、と首を振る電。

（どこ、だ？…ここ……。）

足元の感触は……土と言うよりは……岩。

背中に伝わる鈍い温度からして、これも岩。そして薄暗くとも何処からか漏れてくる光に頼り、目を細めて周りを見渡し見えるのは……暗いからそう見えるのだと最初は思ったが、芯までどす黒い水が広がっている。

場所を説明するのなら……広い湖の中央に浮かぶ孤島……と言えば良いのだろうか。とにかく電はそんな場所に居た。

それと、妙に、この孤島にだけスポットライトが当たっているのは気のせいだろうか。

どうにも向こうが暗いのが原因か、遠くまで見えない。

電はけっこう目が悪い。通学中の車内で本を読み、勉強の時は教科書を読み、休み時間は本を読み、図書室で本の整理のためパソコンを少しいじる……そんな具合ではそりやそうかという感じもするが。

（……、）

とにかく、座り込んだ状から立ち上がってみた。ここがどこかわからんが、人が居ないかを調べるべきだろう。

電はあたりを見渡す。ここは孤島……というより、ただ単に湖の浅いところが僅かに突き出ているというのが正しい認識か。人は衝撃や

驚愕が頭の許容量を超えると逆に冷静になるらしい。とも考える。

(……………！)

と、そこで、動きを止める。

凝視するのは中央。正確には中央に設置された箱のようなもの。

近付いてみると、それは水がなみなみと張られた水盆だった。近くには鮑かアケビのような掌ぐらいある大きさの貝…恐らく器がある。

(これって…………)

ちやぶん。

湖の方へ目を向ける。

耳を澄まさなくては聞こえないぐらい小さな水音が、聞こえ、少しずつ、大きく響いてきていることに気が付いた。

(舟。)

電はかなりの読書家だ。このような場所を書いていた物語の存在を少なからず存じている。

最も、その場所はいい物がある場所でも、よい者が現れる場所でもはなかったが。

(…………ツ、隠れる場所！)

あいにく、そんな場所はない。

だがそんな事を可能にするモノが彼女の手に備わっていた。

ビロードのような光沢を持つ、つやつやでさわり心地の良い、驚くほど軽い布。

お目にかかったの初めてだが、確信があった。

透明マント。

二の句も告がず、雹はマントを後ろ手に掴んでそれを頭から被った。もしこれがそんな素敵アイテムではなかったとしても、とにかく小さくなって隅っこに隠れていればやり過ごせると思ったのかもしれない。とにかく体全体が覆われたことを確認した雹はカバンをしつかりと抱きしめ、息を潜めた。

(……………あれは……)

そして、舟に乗っていた人影は 二つ。

片方は小さな、小さな生き物。

もう片方は……

ああ、なんてことだ。と雹は米神を押さえて自分の目を疑いたくなる。というか間違っていて欲しい。

中身が入っているのか分からないぐらいに完全に体をすっぽりと口
ーブで覆ったもう一人。それは…

(ヴォルデモート……)

予想が確信に変わる。

なんとまあ、自分は、魔法の世界に来ているのだ、と。

第二章・2

アルバス・ダンブルドアは校長室で、冷えた体を温めるという名目の元、ホットココアを口に運んでいた。

…実際はその指の一振りでお火をおこせる事実と、ニコニコとご機嫌な表情からはただ単に温かいココアを楽しんでいるのだろうか。

ふう、ゆっくりと一息ついた後、彼は机の上に置いてある羊皮紙に目を向けた。

「…“あの子”の所へ行ってもらうのは、ハグリットに任せるべきじゃろうな」

“あの子”を思い出したらしく、少し目を細めた。ハグリットが迎えにいったとき、その子にどんなことをどんなふうに話すのかを想像したのかもしれない。

捕まえるのには、苦勞をするかもしれない…そう呟いて、窓のほうを向いたときだ。

ドン。

薄暗い雪景色の広がる窓。いつも通りに閉めてあったそこへ思わぬ乱入者が現れていた。というよりは、ヘッドアタックをかました後と言った方がよいだろうか。

簡潔に言々と、手紙を届けに来たふくろが校長室の閉まった窓にぶち当たったということだ。

これには校長室の管理に非がある。あらかじめ1つぐらいはふくろうが通るための窓を用意しておかなければならなかったのだ。しかしそこへは言い分がある。

だって校長に手紙を送ってくるならば、まずは郵便局から直接、現

校長の飼っている不死鳥フォーक्सを通じて届くのだから。

つまり、このふくろうを送ってきた人物は、なんらかの理由で郵便局へ手紙を預けられない理由があったということ。

「……………」

そうこうしているうちにふらふらしながらももう一度ふくろうは窓に近付き、今度は窓枠に落ち着いてからコツコツとガラス窓を突つき始めていた。

なんともけなげな姿にダンブルドアは椅子から立ち上がっていそいそと窓を開けてやる。

怪しいのは分かっているが、この寒さに凍えるのは見ていられない。

（…………闇の軍勢からではなさそうじゃな）

綺麗に折られ、水に犯されないように二重に包まれた羊皮紙をふくろうの足から取り外す。

ふくろうはかなり立派な体格をしており、それでいて人に触れられても大人しかった。きっと食事も躰もしっかりとなされているのだろう。

羊皮紙の内容を一瞥し、みるみるうちにダンブルドアの顔崖わしくなって行く。

親愛なる、ホグワーツ魔法魔術学校校長・アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア様

そんな長い宛名の次に続くのは、失礼とも取れるぐらいに挨拶も何も無い短い文章。

穏やかなものではなかった。

送り名は…と手紙を裏向ける。

f x
r x
o x
m x
サ x
ク x
ラ x
x
所在

第二章・3

はつきり言つて。

電は、今の状況を正確に把握しているとは言えなかった。

さつきまで自分は図書室に行くべく学校の階段をあがっていたはずであり、こんな映画の撮影場所に来るつもりは考えてすら無かったのだ。

それでも、思考が追いつかない、だが危険は分かるのでとりあえず身を隠すという手段に至ったのだ。

「……………」

ぼそり、と黒いローブの男：ヴォルデモートが何かを言うのがわかった。

きつとあの水盆の緑っぽい液体を、飲め、と言ったのだろう。そう電は判断する。

（あ、…………）

飲んではいけない。

それを分かっていた電だが、止めるための行動が起こせない。闇の帝王がそこに居るというのもあり、またこれが現実かどうか曖昧だったのが原因だろう。

震える指を動かし、小さな小人のような生き物：屋敷しもべ妖精のクリーチャーが、それをゆっくりすくい、覚悟を決めたようにぐいっと飲み干した。

絶叫が響いた。

水盆に入った緑っぽい液体。あれは毒だ。
そしてここは分霊箱を保管するために闇の帝王が選んだ場所。
無理やりにクリーチャーと思いき生き物は水盆の水を飲み続けさせられる。
闇の帝王は水盆が空になったことを確かめると懷から緑色の小さなロケットを取り出し、そこへ入れた。そして這いずり回る屋敷しもべ妖精を笑いながら、杖を取り出して水盆をまた満たす。煙のように立ち去ってしまった。

(……………)

舟が出、屋敷しもべ妖精の弱弱い喘ぎ声だけが響いていた。
ふらふらと、クリーチャーは湖の水を飲もうとしたのだろう。小島の端へと這って行く。水に触れた瞬間、亡者の手がその体を引きずり込んだ！
恐怖に怯えたかなきり声が洞窟に響く。
何本ものどろどろした腕が飛び出し、数える暇も無いうちにクリーチャーの姿は消えた。

ザバツ！！

クリーチャーの姿そのものが無くなった。「姿くらまし」したのだろう。

電は息を潜め、その一部始終をだまって見ていた。

これまで夢を見ている気分だったが、どうやらこれは現実だということで電はやっと認める。

私はハリー・ポッターの世界にいる。

倒れこんでしまいそうだった。そして、本当に倒れこんだ。

第二章・4

次に雹が目を覚ましたのは、また別の男がこの場所に向かってくる足音が響くときだった。

そして雹はその人物を見、誰かをすぐに理解した。

(…… R・A・B……)

どうもこの洞窟は時間までもが歪んでいるらしい。もはや他人事のように呻いた。

レギュラス・アークタルス・ブラック。

彼についての記述は少なかったが、それでもクリーチャーと共にここへ来るのはすぐ後ではないはずだ。

(…… クリーチャーの、愛しいご主人様……)

ぶるぶるしているしもべ妖精の顔が前よりも見やすいアングルだった。

男の方は黒い髪、だが自分とは違うと分かる日本人より彫りの深い顔立ちと肌の色、焦点が合っているのか疑いたくなる目付きで歩いている。

そして隣に立つレギュラスの半分も無い背丈に、青白く、恐怖と老いでしわくちやの顔のしもべ妖精。

両方とも見ていて面白いものではない。

上品過ぎる物ばっか食べてるせいか、大量の油と肉入り中華料理でも食べさせれば血色が良くなるだろうにと思う以前にそんなのいきなり食べたら吐き戻しそうな容姿だがそれはまあいい。

中央へ立ち、石の水盆を覗き込んだレギュラスは、緑色のロケットを持ち出した。闇の帝王が持っていたものとよく似ている。

それをクリーチャーに手渡し、重々しく言った。

「……クリーチャー、それを持っている。この水盆が空になったら、中のロケットと取り替える」

「坊ちゃま！」

お考え直してください、とクリーチャーが喚く。

必死な声に泣き声が混じっているのが原因だろうが、喚くといった方が正しい。

「命令だ、クリーチャー」

貝殻の器を掴み、レギュラスが言った。
その言葉にクリーチャーが黙りこくる。

「……その後は、一人でここを出ろ。家に帰れ。……それと……母上には決して言うな、ここで僕がしたことは。そして、ロケットを破壊しろ。どんな手を使っても」

そう言うと、レギュラスはおもいつきり毒液を煽った。
ヒイツとクリーチャーが悲鳴を上げる。

「が、あああああああ！！」

毒はあの毒液を、麻薬と重油と、なにか濃い塩酸のようなものを混ぜたようなものだと考えている。

喉が焼ける……その痛みに震えながら、それでもレギュラスは何度も何度も液体を飲み干す。

泣きながらクリーチャーがレギュラスを支える。

(……………)

雹は耳を塞ぐような真似はしなかった。
黙って見ていた。

レギュラスのポケットから、何かが転がり落ちた。杖だ。レギュラスもクリーチャーも気が付いていない。湖へ転げ落ちていく。
慌てて雹はとつさにそれを拾い上げた。

マントを被ったまま見上げると、ちょうどレギュラスは水盆を空にした後だった。必死でロケットを取り替えるクリーチャーが見えた。ずるりとレギュラスは体を崩し、湖から伸びた腕に引かれ

「坊ちやま!!」

悲鳴にも近い声が洞窟に響く。

毒液を飲まれたときよりも痛々しい声だった。

(…………ツ、届け!)

雹は、思いもかけなく手を伸ばしていた。

頭の隅で、自分がこんなことをするのは、二人を見たときから決まっていたのかもしれない、と思う。

片手に杖、もう片手でレギュラスの腕を力づくで掴み取る。

掴んだ!

そう一瞬、ほんの一瞬、喜んだ。が、現実はそう甘くは無い。大量の腕が、もれなく雹まで引きずり込もうと引っ張る。

ザボン!!と水の音。

(冷た…ツ、…………ヤバ…)

目をつぶる。

それでも手は硬く握り締めて離さない。

片手に握った杖を奪われないよう、力いっぱい引き寄せる。
遠くでクリーチャーが泣き叫ぶ声がした。

（がはっ…苦し…ッ）

どす黒い、湖の底に沈むのを実感した。永遠に水面に浮かばずここで……

絶対いやだ、いやだいやだいやだ。想像するのさえ恐ろしい。

無駄な足掻きとも取れた、杖を思う。

「姿くらまし」出来るだろうか。

ここはそういったものが使えないように作られている。だが逆らうならこれぐらいしか思いつかない。

水の中で目を開き、どちらが上か分からないぐらいの亡者が傍に居ることに恐怖した。

（どこでもいい、安全な場所へ！！）

そこは、暗く、どこまでも暗い。

第二章・5

ガッシャーン！

「！！？」

ダンブルドアは、いつの間にか居なくなっていたふくろうを探していた手を止め、後ろを振り返る。
今のとんでもない音声は何事だ？

「……う……。つはぁ……」

弱つちい声が下から聞こえたかと思うと、そこには……。二人の子供が乱入して来たようだ。

(……？)

片方はホグワーツの男子生徒の制服を着た、恐らく高学年の男子。
もう片方は…背が低く、どこの制服かは知らないが、とりあえずスカートなので女の子。

観察してみると、漬れたかぼちゃのように床にへばりついているその二人は、この冬のさなか寒中水泳でもしてきたように見事に芯までぐしょぬれ。両者とも真っ黒な髪をしており、それまでも触れればこっちまでびしょびしょになりそうぐらい水を含んでいる。

しかもその水は普通の水道水には見えず、少女の方の白い制服の襟が黒っぽく染まっている。

この部屋は暖房設備バッチリの校長室だったことが幸いか。もし5秒でも外の白世界に放り投げれば凍死しそうぐらい黒い髪から覗く耳は青白い。

「ふう…うう。」

肺の中の空気をすべて吐き出すように、片方の子供：見たことのない制服の女の子の方が息を吐き出した。どうやらかなりのお疲れのようだ。

もぞり、と少女の方が頭を動かす。最低限の体力はあるようだ。

対して男子生徒のほうはピクリとも動かず、死んだようにぐったりと倒れている。よもや本当に死んでいるのではないかと心配になり、ダンブルドアは慌てて二人に駆け寄る。

その足音に意識を覚醒させたのか、少女の方がこちらを見る。

「……あ」

目が合った。

ずぶ濡れの黒い髪に隠れた、酸素が足りない状態だったらしい、ぼんやりとさせた顔は東洋系の黄色い肌。彫りの浅い顔の、焦点の合わない目は黒色。

少女はダンブルドアの顔を見、自暴自棄な笑みで浮かべて微笑んだ。そして、言った。

「……ははっ。死ぬかと思った」

第二章・6

あの時。

緑色の光につつまれて、方向が分からなくなったとき。

急に真っ暗になって、怖くなったとき。

いまやはつきりと思い出した。

真っ赤な光が、太陽のように強く光って、緑色をかき消したんだ。

「……………」

うつすらと瞼をひらくとそこは温かいベッドだった。

消毒液のおいはいないが、腕にぐるぐる巻きつけられた包帯や薬
だなから見るにここは病院らしい。

…見たことの無い場所だ。いろんな意味で。

来たことのない場所であることはもちろん、写真とかでもお目にか
かったことが無い。

まずものすごく広い。天井も高い。ベッドが均等に並べられていて
も、それでもキャッチボールができるぐらいにだだっ広い。

そして石とガラスでできてる。どうみても紙と木の日本式の建物と
は思えなかった。

（で、なんでそんな場所に、私は寝てるんだ？）

朦朧とする記憶に霧のようなベールがかかっていてああもつわかない。考えようとしたとき、カーテンで隔てた隣から声が聞こえた。

「病人は、おきたかね？」

「校長。おはようございます…いえ、二人ともまだのようです」

（…校長？）

ここは学校の保健室だっというのか？

カーテンで仕切られた隣を見る。誰かもう一人がベッドで寝ている。

（…隣で寝てるのは…十中八九）

頭の中が混乱していることを実感しながら電は眠っているふりをした。

というより、体を起こす気力が無かった。聴覚だけを働かせる。

「…そうか。できれば早く話をしたいんじゃないが……」

「でも…起きてすぐ、話が出来るようになるかは分かりませんよ。あれだけの重症なんですから。」

自分の事を話しているのか？重症とは凍傷の事だろうか。

（…思い出した。そうだったそうだった。）

思い出した。

（あの洞窟の湖からワープしたかと思ったたら…なんかめっちゃくちゃ

寒い真つ白な雪の中だったんだ。そんなもって水の中に引きずり込まれてびしょ濡れのところに氷点下なもんだから『凍死する！どっか温かい所！』って杖を握ったら今度は…」

……………。そこから先は思い出したくない。

それにしても、自分はどのくらい眠っていたのだろうか？

「…それにしてもあの子はどこの子なんだろうねえ。こっちの本とか、ぜんぶ見たことの無い文字で書かれていましたよ」

段ボール箱に放り込んだあの重たい書物達か。

電自身は、あの時湖に置いて来ちゃったかなと思っていたが、違ってたようだ。

「あの肌の色と黒い髪だけで判断するなら東洋の子じゃろう。」

「そうではなくて……」

「わかつとる。なぜあの子はたった一人で、このホグワーツに来れたのか、ということじゃな。」

ホグワーツ…ああやっぱり記憶が途切れる前に見たのは……、そこまで来て、考えるのをいったんストップする電。かなりいやな展開が予想されますがどうしましょう。

「安心せい。すくなくともあの子は闇の魔法使いではない。とにかくここに来た経緯を聞いてみなくては分らん。…では、彼女が起きたら呼んでくれ。マダム。」

「分かりました。ダンブルドア校長」

電は泣きたくなくなるのを抑えて聞き耳を立てていた状態から体を起す。どちらかといえば、嫌な予感が当たった。悲しい。

ガシャン！

思いっきり水の入っていない金属コップが床に落ちた音が響く。
体を動かすことすら難しく、声を上げて呼び止めることができない
と判断した末の行動だった。

案の定、というか思惑通り、というかこっちに気が付いてくれた二人。

「あらあら、起きたの!？」

「……………ッ」

そつと体に触れられ、やさしく支えてもらったが、体がものすごく
だるい。

そして気が付く。

ちよつとまで。さっきの会話も含めて、この人らが話してるのって
英語

「無理して起きちゃだめよ…そう、ゆっくり…」

「…あ、ありがとう、ございます……………」

切れ切れに呟いた台詞は、やはり英語っぽい。

…おいおいおいおい。DVDの言語機能じゃあるまいしなんで
いきなりこんな、とは思うがもう驚くのにも飽きてきていた電だっ
た。

とりあえずそれよりも。

「えつと…」

「ん？」

「あ、の。コップ、落しちゃってすみません……………」

「そんなこと気にしないでいいわよ。それよりしゃべっても大丈夫？どこも痛くない？」

「大丈夫、です。」

このカーテンの向こうから走ってきた女性はマダム・ポンフリーで認識は合ってるのか。

ぐったりと体を横にした電は考えるが、とりあえず聞けばいいかと軽く結論する。

わき腹がごつごつするなあ、と思ったら包帯が丁寧に巻かれていた。ちゃんと挨拶すべきなのに、横のまんまですみません。

「…あなたが看病してくれたんですね。ありがとうございます。」

「いいのよ。私の仕事ですからね」

「そちらも…騒がせて、すみませんでした。」

「よいよい。」

もう一人の方は…みごとな銀色のひげを蓄えたおじいさん？と表現するのが妥当か。

名前はもう分かってる。

電はとりあえず自己紹介する。

「ここは…、医務室ですよね？」

「ええ。ホグワーツの医務室よ。」

「……。ホグワーツ、ですか。はあ……」

「ど、どうしたのあなた、顔が真っ青よ！」

青くもなるよ、なんならこのままぱったりと倒れても文句言わないで欲しい、と思った電だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345v/>

桜

2011年10月9日13時03分発行